

バベルのタワーレコード

TOWER RECORDS of Babel

徳井直生

Nao Tokui

私はすっかり音楽が作れなくなりました。

のっけから私事で恐縮だが、どうやらスランプに落ち込んでしまったようだ。ミレニアムを前に遅まきながら音楽制作を開始し、2002年に最初のEPをリリースして以来、私は細々とはあるがコンスタントに音楽を発表してきた。それが2005年のリリースを最後にぱたりとつくれなくなってしまう。思いつく理由はいろいろある。仕事が忙しい/単純に歳をとって感性が鈍った……。何が答ということではできないが、自分と音楽の関わり方がここ2、3年で大きく変化したのは確かである。

もちろん、音楽を聴かなくなったわけではない。今でも私のコンピュータのハードディスクには、数万曲のMP3ファイルがストックしてあるし、iPodとヘッドフォンは片時も手放すことがない。人生のなかで、今ほど音楽に囲まれた生活を送っている時期はなかった。同じことは多くの読者にも当てはまるのではないだろうか。好むと好まざるとにかかわらずインターネット全体がユニバーサルなジュークボックスになりつつあることが、そうした傾向を加速させる。SeeqPod^[1]に代表される音楽検索エンジンや、SongBird^[2]のようにネットワーク上の音楽ファイルをiTunesのように管理し、プレイリストを作って再生できるようなソフトウェアも開発されている。「世界最大のジュークボックスが欲しければ、目をつぶってYouTubeを『聴く』とよい」というアドバイス^[3]もあながちの外れではないだろう。ワンクリックで自分の好きなありとあらゆる音楽が聴ける環境。かつての音楽ファンにとってはユートピアのような現実が実現した当初の反応は、「途方もない歓び」だった。それは、ボルヘスの「バベルの図書館」^[4]

の主人公が、無限に続く図書館のなかに過去/未来のありとあらゆる書籍が所蔵されていることを知ったときの感情に近いと言えば大げさすぎるだろうか。

しかし、同じように「途方もない希望の後に度の過ぎた落胆が訪れ」ることになる。人類の歴史が営々と築き上げてきた圧倒的な音楽の集積のなかには、自分が聴きたかった、あるいは作りたかった音楽に近いものがどこかに眠っている。そのこと自体は、エジソンのフォノグラフの発明以降の音楽の産業化とパッケージ化が進んだ20世紀を通して、厳然たる事実として存在し続けている。ところが、Google、iTunes Music Storeのようなデータベースと検索の仕組みは、そのどこかに存在するかもしれない楽曲へのアクセスの可能性を、不確実ながら現実のものとして提示してしまった。レコードやCDの棚が並んだ中空の回廊が、無限に続くレコード屋を見渡すかのように、圧倒的な量の音楽へのアクセスが実現したとき、アーティストはときに無力感にさえ襲われる。現存するアーカイブに自分の創作を付け足すことにどんな意味があるのか。そもそも新しい音楽などありうるのか。巨大な創作物のアーカイブは、つねにより新しいものを指向する制作者にとってのディストピアにもなりうる^[5]。

音楽とそのリスナーの関係が、MP3にiPod、iTunesなどのテクノロジーが音楽の消費形態を大きく変えてきたことは今さらここで書くまでもないことだろう。雑誌や新聞紙上でもデジタル音楽についての記事が載らない日はないくらいだ。だが、喧伝される音楽の変化はえてして、パッケージメディアやショーを売る音楽「ビジネス」の変化であることがほとんどで、音楽そのものがどう変化していくのかが語られることは圧倒的に少ないように感じられる^[6]。音楽が売れなくなることに対しては、レコード会社同様、私も私の音楽仲間も一様に心配している。同時に、パッケージとしての音楽が現状にそぐわないことが自明化するなかで、曲やアルバムといった単位に基づいた音楽のあり方そのものに漠然とした不安、不透明感をも感じる。合法/非合法的を問わずMP3ファイルがネット上にあふれている